

# パネルで読む

## 「女人禁制」

平成三十年代岡山市男女共同参画大学「さんかくカレッジ」専門コース

「女人禁制」を考える―伝統・しきたりの裏にあるもの― 後期講座受講者作成

※許可なく無断で転用することを禁止します。

「女人禁制」の

謂われたとれば そこここに  
ご都合主義が 垣間見え

伝統の

名のもと守る

「女人禁制」

慣習をつくりし者が

人ならば

改むるに憚はばかることなかれ

## 結界門

## 女をはばむ

## 行者道

## 日本初

## 博覧会で

## 山開放

## 結界を

## くぐってみても

## 変わりなし



写真は修験道の霊峰、奈良県「大峰山」(山上ヶ岳)の結界門である。ここは今日に至るまで「女人禁制」のままである。

明治政府が近代化の流れの中で、国家神道を浸透させる目的で、1868年(明治元年)に神仏分離令を出したため、各地で廃仏毀釈が起きた。神仏習合の修験道に対しては1872年(明治5年)「修験道廃止令」を出した。そのため、修験道においては「女人禁制」問題を考える余裕もなく、多くの修験道の山が「女人禁制」のまま残ったのである。

それまでに「女人禁制」は世俗的な理由で解かれてきたが、大きな流れは「修験道廃止令」と同年に出た「太政官布告」であった。政府は「神社仏閣女人結界ノ場所ヲ廢シ登山參詣随意トス」として「女人禁制」を解くよう通達した。

比叡山の解禁も同年。日本初の博覧会が京都で開催されることになり、多くの外国人が来京し、比叡山への来山も予想された。文明開化の日本で、「女人禁制」という「遅れた慣習を持つ日本」というイメージを外国人に与えないことが解禁の理由だった。

一方、高野山は日清・日露戦争で男性の働き手が不足することになり、1906年(明治39年)解禁した。

伝統が守ってきた「女人禁制」。伝統とは何なのか？

※修験道…日本古来の山岳信仰と、仏教の密教、道教などが結びついて平安末期に成立した宗教

※廃仏毀釈…仏教の排斥運動

※神仏習合…日本固有の神の信仰と外来の仏教信仰とを融合、調和すること

未だなお

「女人禁制」後山

境界門

希少価値と

言わしめる

「女人禁制」も

パワースポットの

経済効果

写真：美作市ホームページより



地図：美作市ホームページより



パワースポットは、気がみなぎる場所、霊的な力が満ちている場所として多くの人を訪れている。

「女人禁制」を守ることはパワースポットと捉えられ、多くの人を呼ぶことになるのだろうか？ 後山の「女人禁制」区域は道仙寺の私有地である。

平穩祈願の祭りにも

女の役目は裏仕事

男の祭り

だから 女は宝なし

時代が流れ

女も曳ひき手はやし囃子で 祭りに参加

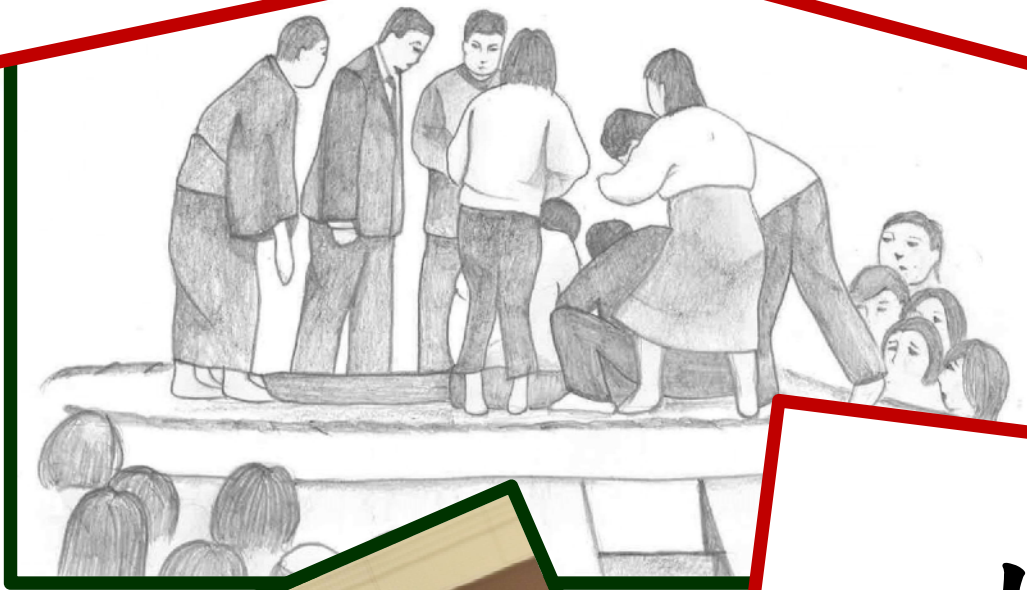


日本全国に伝統的な祭りは沢山ある。神道系の祭りや、祭りの在り方から女性が主役になれないものがある。しかし時代の変化とともに、条件つきで女性の参加が許されるようになってきた。

五穀豊穰、国家安穩、万民豊樂を祈願する祭りなら女性も表舞台で参画できて良い。女性の人権が認められた今、伝統の男の祭りを一考してみてもいい。

救命でも  
女は上がれぬ  
土俵上

土俵上  
伝統と命  
せめぎ合う



女性知事  
土俵で挨拶  
何故あかん



写真：宝塚市提供

## 精進落とし

修行終え

結界出でて

精進落とし

気色わる!

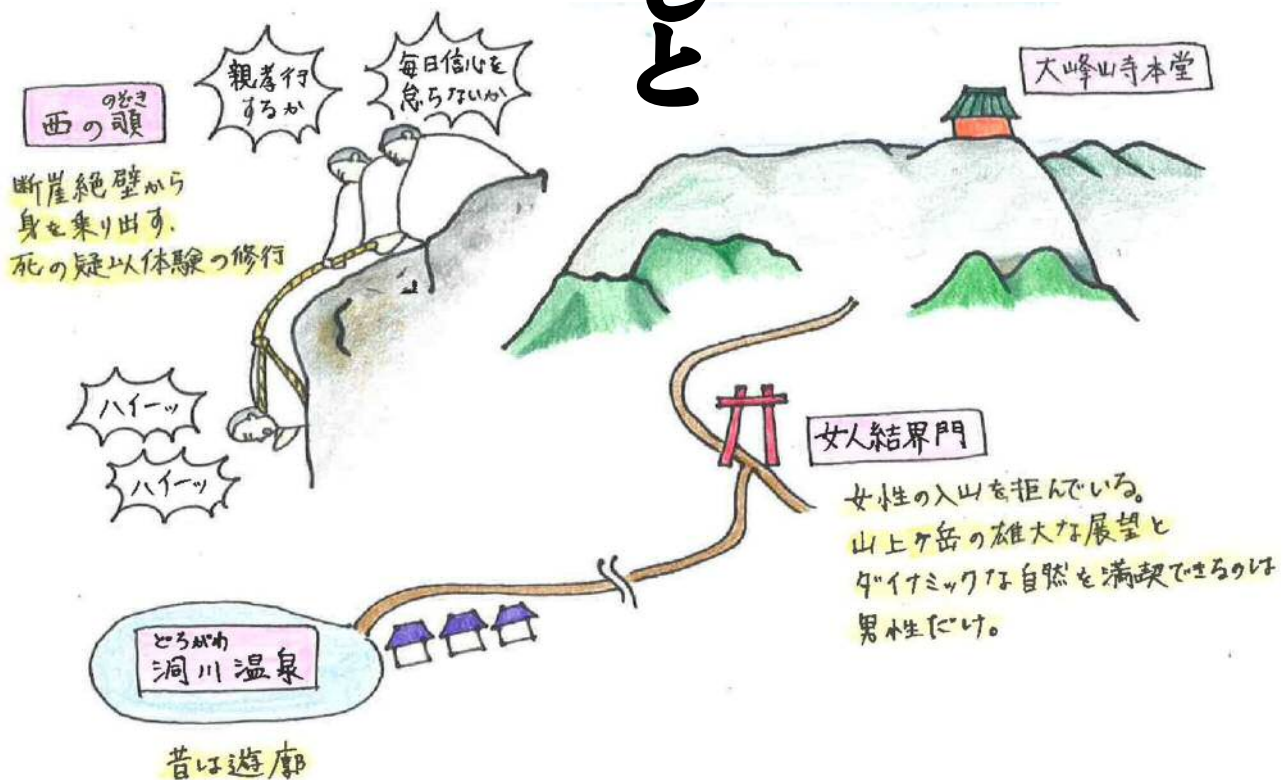
買春が精進落としと

悪びれず

修行後に

精進落としとして

何を得る



「大峰山」は修験者でなくても、男ならだれでも自由に登ることができる。しかし、女は1300年続く「女人禁制」の結界門から先には立ち入ることはできない。

その昔、「大峰山」のふもと洞川地区には、遊廊があった。現在は温泉地になっている。

修行を終えた男たちの中には遊廊に立ち寄り、「精進落とし」と称して買春をして、日常生活に戻った者もいたという。

女がいては心を乱すことになり、修行の妨げになるといいつつ、その一方で女を利用して己の欲を満たす。せっかく苦勞して修行した成果は何だったのだろうか。

妻・母・娘

命産む性

なぜ穢れ

# 女は穢れ

私いて

母がいるから

あなた  
男いる



いばる男

穢れた女に

甘えるな！



産小屋（京都府福知山市）

「女は穢れ」とされたのは、月経・出産時の血を根拠としている。

何か得体のしれない事象に対する、畏怖の念から、死・月経・出産を忌避し、それらを穢れとする観念が社会に定着した。

月経や出産を不浄なものとし、女が穢れた身であることを理由に一定の場所や行事から排除してきたことが「女人禁制」である。

「産小屋」は、出産時から産後の一定期間を家族と離れて過ごした場所であり、その歴史は『古事記』や『日本書紀』に出てくるほど古い。当時の産小屋は命を育む神聖な場所とされ、しめ縄が飾られたこともあった。

しかし平安中期以降、月経・出産の穢れが不浄なものという意識が強まり、産小屋も穢れの間と変化していった。

第二次世界大戦後まで使われていた地域もある。



宗教に限らず、伝統や慣習など脈々と続く物事の根っこをたどると、女性差別が潜んでいることもある。ただ受け入れるのではなく、中身を知って自分で考えることが大切ではないか。

## 意味知らず

## ただ読み上げる お経なり

## 『法華経』

ほけきょう

## 女は男になつて

## さとりに至る



『法華経』には、男であればたとえ悪人であっても仏になれると説かれている。代表として「提婆達多」が登場する。しかし、龍王の娘は世尊に貢物をし受理されたが、修行を命ぜられ男身に成つて仏になったと説かれている。これをへんじょうなんし変成男子という。

## 『浄土経』の論釈に

## 「浄土には、女人と根欠こんけつはいない。」

## と記されし

論釈とは経典を解釈したもの。「根欠」とは障がいのある人のこと。女性も障がいのある人たちもそのまま救える経典はないものか。

でかしたと

今も男児誕生喜べり

この違和感は何に？

危険を理由に

差別されし

女の仕事

差別なく

女性も乗り込む

宇宙船

いつまでも

あると思うな

男社会

現代社会においてもなお、家制度の名残を引きずりながら、そこから抜けきれない感覚から男児イコール後継ぎと思うのか？

男女平等の視点からは違和感は拭えない。

一方で、女兒は実家に寄り添い、親の介護等頼りになると喜ばれる風潮もでてきている。

近年まで職業的に「女人禁制」であった代表的な例としては「トンネル工事」がある。

「トンネル工事」の現場では、2000年(平成12年)に入っても女性が坑内に入ることが拒まれてきた。「女が入ると山の神が怒って事故が起きる」と迷信めいた理由を言われることもあった。しかし過去、炭坑では多くの女性が坑内労働を行っていた。1928年(昭和3年)「鉱夫労務扶助規則(後に鉱夫就業扶助規則)」の改正により女性の坑内労働が禁止されたが、第二次世界大戦中には例外的に多くの女性が坑内労働に従事することになった。戦後は1947年(昭和22年)に制定された「労働基準法」において全面禁止の規定が設

けられた。しかし、施工技術の進歩、安全衛生技術の向上により規制緩和の要望がなされ、2007年(平成19年)より女性の坑内労働の原則禁止が改められ、女性技術者が坑内の管理、監督業務等に従事できるようになった。危険な現場でのリスクは性別に関わらず同様であり、誰もが安全に働きやすい環境にしていけることが大事である。

その他にも「酒造り」「マタギ」「漁師」「寿司職人」「大工」「伝統工芸職人」などの世界で「神事」や「伝統」の名のもとに女性を職業から締め出す例は多くあったが、現在では女性も進出している。

「女人禁制」

破る勇気が

道開く